

吉野窓由来

関口泰

『山湖随筆』関口泰著 1940年 那珂書店より 135／141P

北鎌倉浄智寺谷へ居を構へてからもう七年になる。浄智寺の奥は私の家一軒で、夜などは私の家のあかりと、私の家へ来るまでの道の街燈の外は、一望四顧、燈火が見えなかったのだが、今では小さい茶室や離れまで数へれば九棟、二、三年前に再建した浄智本堂の屋根まで入れば、此の谷に数年の間に十の屋根が見られるやうになつてしまつたのである。

ここに居をきめたのは、ほんの偶然なことだが、寺の前の甘露水が池にたまつて、細い溝をこんこんと流れるその清冽な水と、見上げる坂路を杉・檜の森が、山門の額の「宝所在近」の句で活かされて見えたことは事実だ。空いてる地所は五千坪といふが、二間幅の道を掘り拡げて貰つた上がまだ新しく道の両側に積まれてゐる外は、雑草が丈高く生いて一寸は足を踏み込めない位で、去年まで畑を作つてゐた所とは到底思へない。

時は二月の終りで、さすがに春は何となく空にも上にも来てゐて、枯葉色の萱山を近景にして、向ふ谷に見える明月院や円覺寺の山波は紫色に煙つてゐる。頼朝が鎌倉を選んだのは要害よりも、荒々



しい関東平野において鎌倉辺だけが、山の姿が京都に似てゐるからであつたらうといふ説も肯けるやうに、檜と杉と松で黒く見える向ふ谷の山の姿は、京の東山あたりを思はせるものがある。今では庭樹も大きくなり、隣りの屋根に邪魔され、それに北の方には窓が広く開いてはゐないから、家の中からその眺めは十分にとれないが、それでも雨に煙る夕方や、雪のやんだ朝など、此の谷の景色一番の眺めだと思はせるのである。全く谷を上つて振り返ったとき、両方から迫る西山の向ふに、淨智寺の森を中景にて此の黒木の山なみを見たことが、此の谷と私とを結びつけた偶然的の縁なのである。

因縁といへばもう一つ、北鎌倉の駅へ帰るとき、ふと円覚寺の前降魔橋の上に掲げてある黒塗りの黒板に白い文字で書いてあつたのが、法句經の文句であつた。「山でも谷でも、森の中でも、水の涯でも、善き人の住むところはみな樂し」といふ意味であつた。その後も氣がついて見る度にいろいろの御經の文句が掲げてあるが、その時の心にかうも響いた御經はなかつた。そしてあそこにしよときめたのだつたが、今考へて見ると、阿羅漢の住んでゐたであらうよき谷を選んだのか、自分が阿羅漢であつたのかを樂土にすると解釈すべきなのかはわからない。

草を刈つて一応整地して見ると、磨かれた珠は光りを加へた。谷の極まる嶺の上には五百年の齡を思はせる金宝松が天に枝を拡げて立ち、蔓の垂れた巖壁はどうしても何人かの高僧が面壁したであらう何百年の歴史を語つてゐる。たしかに人が見た巖だと感じさせるやうに、人の氣が巖の中にしみてゐるのである。

夏に家が建ち上つての秋である。道を隔てて刈り残した薄原には、赤穂を吹いた尾花がなびき、上の段へ上る所に檜の小さな森がある辺が、一つの絵をなしてゐる。どうしてもあの辺に塔がほしい所だ。室生寺の五重塔をもつて来ようと空想した程、室生寺の塔は小さく愛すべきものだ。実際に小さい以上に玩具人形のやうに美しくも力可憐い存在だ。弘法大師一夜造りの伝説がある位にささやかだ

が、多武峯の十三重塔や薬師々の五重塔に負けない芸術的建築だ。

弘法大師が一夜で造ったなら、一生かかったなら出来ないこともあるまいなどと大それた野望を懷いて、その後一年か二年室生寺の塔に凝ってゐたが、とてもこの方は及びもつかないことによつて、自ら解決或は解消してしまつた。

次で湧き上つた空想が吉野窓の建築だ。これは前から吉野窓を知つてゐてあれをここへ建てようと思つたのではなくて、義弟の旭谷左右に案内されて京都の茶席を見物してまはつてゐる時に、高台寺の中の佐野画伯の家にある「遺芳」の席を見て、これはいいと思つた。無論茶道の方からではなくて、私の庭における絵画的効果からの話であるが、二坪か三坪の小さい家に比較してトテツもなく大きい三角形の屋根と、伽藍石を踏まへた大きな丸窓は、それだけで絵だ。それに何よりも、一畳大目の茶室と二畳の水屋は、建築費からいつても、宝生寺の五重塔の如く空想に終らずに実現の可能性をもつし、長く茶室につかはれずに暴風雨に壊されたまま蜘蛛の巣だらけの物置のやうに、庭の隅に抛り放しになつてゐる此の可憐なる茶席は、柱や床板の一つひとつに高価な正札のつけてあるやうな富豪の茶室とは事変り、私に消極的自信をつけてくれるに十分なものがあつたからだ。

それで洋画家たる旭谷と、ドイツのパウハウスにゐた新建築家の山口蚊象君とに相談して早速建築をはじめたのである。鹿子木門下の洋画家ではあるが、京都に育つて裏千家の茶の素養もあり、六、七十の茶席を廻つて研究して斯道の大家にならんとしつつある旭谷と、分離派の新建築家ではあるが、早く茶室建築に目をつけて、ベルリンで修業してゐる間に私と茶室建築の約束をした山口君であるから、変に型にはまつた茶の宗匠や、高い金をとりつけた茶室建築家と相談するよりは、余程話がつきやすいわけである。

吉野窓といひ遺芳席といふのは、徳川初期、今から三百年前の名妓傾城吉野太夫に因むのである。

吉野太夫には、高安月郊の戯曲「桜時雨」といふよりは、片岡仁左衛門の舞台で馴染があるだけで、仁左衛門の扮する灰屋紹山は子の紹益が吉野太夫を落籍した時より十年前に死んでゐるから、「北窓瑣談」や「近世崎人伝」に伝はる「桜時雨」の話は事実でないとの事だが、それはどうでも、吉野が茶道に素養のある立派な婦人であり、紹益も博学多才なることはその随筆「にぎはひ草」をよめばわかるが、そして共に光悦の感化に与つてゐる事は吉野の筆蹟にも現れてゐる。

吉野窓の号は即ちこの吉野太夫が、佐野紹益の室となつてから、風流な家庭生活を送つたと伝えられる茶室なのであつて、今やはり高台寺にある鬼瓦の席は紹益の茶室で、付書院の障子をあげると、斜に吉野窓が見えるやうな配置に作られてゐたものだ。この窓と窓とを向ひあひに二人が顔を見合せてゐたものでもなからうが、吉野窓は明眸の佳人を偲ぶにふさはしい、よい意味で女性的な美しい建築だといふことはいへる。遺芳席といふ額は今でも前に此の茶席が移されてゐた建仁寺の岡林院に遺つてゐる由であるが、寛永二十年吉野三十八歳にして夭折した時、都をば花なき里となしにけり吉野を死出の山にうつして

と嘆いた紹益が、吉野を忍んで「遺芳席」の名を与へたとの伝である。

吉野が三十八で死んでゐるのも、名妓吉野を永久に若く美しくしてゐる。吉野が如何に名声を馳せてゐたかは、寛永四年丁卯秋八月、明の呉興李湘山といふ者が、夢に吉野と会つて愛慕眷恋、『日本曾聞芳野名。夢中髣髴猶驚。清容未見恨無極。空向海東數鳳行。』といふ怪しげな詩をよせ、翌年支那から吉野の像を請うて來たので、遊客相議し画工に命じてこれを写さしむること七幅、これを商人と計りて綾羅と代へしむといふまゆつばの話があるが、これよりも「色道大鏡」に出てゐる逸話の方が面白い。

ある時太夫十八人が集り、華美を競ふ上職どもが今日を晴れと綾羅綿繡を着飾つてゐたが、此の日

吉野は客があつて曉まで起きてゐたので、まだ寝てゐるといふのを、迎へを出すと、早何れの人も来給ひつるかと思ひ出で、寝間にて手水を乞ひ、寝乱れ髪のまま座に出でた。肌着は白綾で上に無地の黒き衣を二枚重ね、紫のくくし帯を廻し廻して室に入つて来て上座に着いた体に、一座の太夫どもは其の美貌風格に魅せられて挨拶するものさへあらざりしとかや、といふのである。

又「続近世崎人伝」卷之三「傾城吉野」の中にかういふ一節がある。

『ここにいとまづしき独ずみの鍛冶あり。東寺の御影供の折に見そめてより、起臥おもかげ身にそひ露もわすれず、月日を重ねてつみたる銀そこばくに成りたるを懷にし、島原の出口に往て「いかがせむ」とたたずみてありける時、是が仕ふ女の童二人出来たるを誰とは知らねど打招きて、此の名妓にたいめすべきやうをとひはかりしかば、大きにわらひてやがて走り帰り「よにをかきことこそあれ、いとも浅ましくやつれたる男が吾太夫の君にまみえにしと申すは」とて手をたたき笑ふを聞きとがめて、人をやりてその由をつばらに問はしめ、とし月あまたおもひをこがせしやうを聞きて、其の日をまらうどにしかじかと語りて、しばしの暇を乞ひ、酒さかななどこうじてもてなしぬ。……かくて明日の日桂川に身を投げし者ありしが一通の遺言あり「とし頃のおもひをはるけて今は世におもふことなればかく身を捨つるなり」と書けり。何事とも知られざりしが此の鍛冶男なりけるとかや。稀有のことといふべし』

今の三面記事に翻訳してしまつたのではないと興無きことになるが、二十二歳の年少富豪灰屋三郎兵衛と前の関白近衛応山公が張合つて敗れ、『年来誤り候て執着候事之今更截断難叶事出現候て妄念乱儀、一両日山居候而仏法之道理も申談候は如何云々』といふ書簡を八幡の松花堂昭乗に送つてゐる落籍事件は、此の鍛冶職登樓の翌日、鍛冶職人水の前日の出来事といふことになつてゐる歴史的事件なのである。

私が今筆を執つてゐる書齋からも頭を少し前に出すと左に吉野窓が見えてゐる。萱の屋根の色も古び、鎌倉の骨董屋で購つて来た二百年前のすり鉢の朱色もよく映つて来た。まだすっかり暮れ切らない薄暮、まだ萱屋根の形がほのかに見える頃に燈を入れると、一間四方の壁に直径五尺二寸の丸窓が白い障子の棧を薄墨に見せて、大きな雪洞のやうに浮くのは何ともいへず美しい。

丸窓を八寸開いて、吉野太夫のやうな白い顔がのぞけばといふ妄念も起るが、この谷には一寸そんな白い顔は存在しないので、安心して本を読み、つまらない原稿も書いてゐられるのである。吉野窓の前には梅の老木がある、後にははちくの竹藪があつて、崖の紅葉は年々に美しくなつてゆく。そのズツと上には金宝松があるのだが、それは軒が邪魔になつてここからは見えない。どれ、筆を擱いて、縁へ出て金宝松でも仰ぎ見ようか。

(このページ作成の引用者(伊達美徳)による注)

この随想は、他の随筆と合わせて『山湖随筆』に所収(135~141P)してあるが、初出は記載されていない。関口泰が浄智寺谷戸に住むようになったのは1930年からであると、その著書『金宝山浄智禅寺』(1940年)の後書きに書いている。したがつて、この文章はその7年後だから、1937年に書かれたことになる。

山口蚊象がここに茶室を設計することになったきっかけは、関口と山口がベルリンで出会つてその約束をしたとある。山口がドイツに居た時期は、1931年の春から32年の6月半ばまでである。関口が朝日新聞のベルリン特派員として滞在したのは1932年の4月から11月までであるから、山口と時期が重なる。また、山口の滞欧時の手帳に、「関口泰(鎌倉)」の記入がある。山口の言『住宅建築』では、矢代幸雄を介して日本ですでに関口と知己だったようである。

関口は、山口が「バウハウスにゐた」と書いているが、山口はバウハウスの創立者のW・グロピウスの下で働いたが、バウハウスには入っていない。